とかち新聞
主筆 松山明
(発行所)北海道足寄郡足寄町 とかち新聞社 電話1351番
本紙定価 1部20円 1カ月50円 1カ年前納500円

まさに互角の一騎討ち

足寄町長選 中心市街の動向いかんに

一月いらいお互いにしのぎをけずつての後援会活動をつづけていた足寄町長選はいよいよ四月二十一日から本番入り。

三選をめざす現職の高橋安蔵氏と、これをはばもうとする小林弘道氏との対決で、片や八年間の実績で信任を問う守りの態勢に対し、片や若さと町政の刷新をスローガンに攻勢に出ており、この一騎討ちはこれまでにみられない勢力伯仲ぶりというのが一般の見方で、告示後七日間のたたかいが管内でも注目の的となっています。

農村は四(高橋派)分六(小林派)

高橋後援会の会員数は五千五百名、小林後援会の会員数は五千七百名といわれており、合計すれば足寄町の有権者数をはるかにオーバーする勘定となるので、どちらにもダブっている後援会員がいるわけで、双方ともこの三カ月余の後援会活動のはげしさを示しています。

本番を迎えての目下の状勢では農村部落地帯では三年つづきの冷害凶作のあとだけに、現状不満の空気が新人による新施策を待望する気運ともなっているので、どちらかといえば小林派に有利なようで、四分六分の差で高橋派が喰い込まれているもよう。

従って告示後にこの態勢を高橋派が五分にもってゆけるかどうかがひとつのポイント。

これに対して大栗田の中心市街地はなんといっても高橋派の金城湯池であるだけに四分五厘、五分五厘の差で小林派が押えられているもよう。

従ってこれから小林派が中心市街地を五分々々のタイにもってゆけるかどうかが勝敗のわかれ目となりそう。

両派の支持層は—

高橋氏の強味は

一、足寄市街地草わけの大地主の子として生れながらの町の支配者然とした立場で、市街地有力者の大半が高橋家の借地人で、役場庁舎そのものが高橋氏の私有地に建っていることで示されているように、土地につながる利害関係者が多いこと

二、大地主に似合わず庶民的で生来の人なつこいあけっぴろげの朗らかな性格で親しまれ、親戚友人、知己が多くイザ選挙ともなれば運動の手足が多いということ

三、戦前からの議員で副議長から議長を経て町長二期をつとめた実績による信頼感からもう一期で未解決の問題を解決させて有終の美をと願う熱心な支持者をもっていること

小林氏の強味は

一、足寄全町にわたって最大の檀家をもつ総泉寺で育ち西小学校で教鞭をとった教え子が青年層の中堅となっており、二十七才で町議に当選いらい連続三期で文教厚生委員長で活躍、道東建設の社長として三十九才の若さで町内のホープ的存在

二、高橋氏と同じ保守系に属しているので保守派同士の一騎討ちだが、高橋町政の三選を阻止するために革新派が全面的に支援して保革連合の選対をバックにしていること

三、役場庁舎の敷地問題や公用廃止地問題は高橋氏個人の土地がからんでいて高橋氏が町長の座にあるために未解決となっており、町民との裁判の連続で対内的な紛争と対外的な信用の失ついによって新町長登場への期待が強いこと

などがあげられましょう。

革新派が勝敗を決定?

前々回の三選をめざす川上直通町長に対して新人の高橋氏が一千余票の差で勝ったのは、当時の川上町政が〝つり橋〟問題や中間駅問題などの不明朗な問題を背景として町政刷新の声が強かったことも原因しており、そういう点では現時点の高橋町政も川上町政に劣らず町政刷新の矢おもてに立たされているのは事実で、これまた町政に新風をとの声が強い筋としては新人の小林氏が一応優勢とみられます。

しかし川上氏と違って高橋氏は生えぬきの足寄っ子で町最大の資産家で選挙上手であるだけに自信をもっての三選出馬といえようし土地のつながりや縁つながりで、全町網の目の支持者層はこの選挙で高橋氏を落しては大変とばかりに必死の努力をかたむけているのも事実で、町政上のまずい面は町長のせいではなく側近やとりまきがまずかったのだと弁明もしています。

それにしても高橋町長になって有地に建っていることで示されているように、土地につながる利害関係者が多いこと

二、大地主に似合わず庶民的で生来の人なつこいあけっぴろげの朗らかな性格で親しまれ、親戚友人、知己が多くイザ選挙ともなれば運動の手足が多いということ

三、戦前からの議員で副議長から議長を経て町長二期をつとめた実績による信頼感からもう一期で未解決の問題を解決させて有終の美をと願う熱心な支持者をもっていること

小林氏の強味は

一、足寄全町にわたって最大の檀家をもつ総泉寺で育ち西小学校で教鞭をとった教え子が青年層の中堅となっており、二十七才で町議に当選いらい連続三期で文教厚生委員長で活躍、道東建設の社長として三十九才の若さ

からの人事は助役も教育長も病院事務長も林務課長も厚生課長もすべて町外から(庁外からという形で)町内、庁内には人なしという人事にたいして小林氏は三役といえども原則として庁内からの起用を言明しており、移入人事の連続で張り合いをなくしてきた古参の役場職員にしても批判的だったものです。

この選挙に立起を表明した高橋小林の両氏とも保守派に属するので革新派では昨年いらい統一候補を立てるべくより人選につとめてはきたものの三つ巴戦にもっていったのでは現職の高橋氏を有利にさせるだけとの状勢判断から高橋町政に終止符を打たせることが当面の前提要件であるとして社会党も共産党も地区労も農村を守る会も農村青年会議も上利別民主協議会もが全面的に小林氏を支援することになったもので、各級選挙において常に三千票内外の結集力を示す町内革新派の支援ぶりがこの町長選挙をどう決定づけるかが注目されます。

社説 町長選挙のあとにくるもの

(一)

第一次の高橋町政にたいして共産党だけが独自候補(陶守哲夫氏)を立てたので、たとえ町政批判の空気があったとしても共産党を名乗っているだけに得票はせいぜい三百票から五百票くらいとみられていたのに、なんと二千五百票もの大量批判票を許したもので、調査直後に当の高橋氏は「オレはやめた」とフンガイしたそうです。

(二)

この第二次高橋町政は以前にも増して対内的にも対外的にもなにかと批判の的となっているのは周知の事実である上に、こんどの対立候補は保守、革新の両方から巾のひろい支持をもっての出馬なのでこの現職と新人との対決は予断を許さない堂々と四つに組んだ大相撲となっています。

(三)

この一騎討ちが一月いらいの後援会合戦からいよいよ二十一日の告示によって二十八日に町民の審判をうけるまでのあたたかいのはげしさは、二十九日の開票の結果によって勝敗がついてからでもなおかつあとに尾を引きそうなはげしさであるところに問題があるもそうです。

(四)

「勝てば官軍、負ければ賊軍」とは町長そのものの政治姿勢にある選挙がおわってもあれは高橋派だからあれは小林派だからとのラク印を押しての人事がおこなわれたり、地域の要望にたいして手加減を加えたり、商店の買物までに差別をつけるというこれまでのシキタリはこんどこそ一掃しなければならないのであって、その役割をはたすべき重要なポイントは当選しない、町議会に町長派だの反町長派などという派閥があってはならないのであります。

(五)

その町長をチェックすべき立場の町議会が自らの権威をかなぐりすてて町長の使用人のような形で政治の明正選挙も合なしとなるので府与党ぶりを発揮して、どんな違法行為にたいしても多数決でもって、有権者も選挙のしつ放しであってはならないのであって、その役割をはたすべきインチキな審議ぶりは許されないのであって、その役割をはたすべきインチキな審議ぶりは許されないのであって、その役割をはたすべきインチキな審議ぶりは許され